

「アダム・スミスの価値尺度論」に関連するS.カウシルの所論およびT.サウエルの所論（1973年，1974年）

——「アダム・スミスの価値尺度論」についての
海外における諸研究(16)：1970年代(その5)——

中 川 栄 治

序

わたくしは、主に今世紀に入ってから海外において発表されてきた「アダム・スミスの価値尺度論」に関係する諸研究を整理する試みの一環として、本誌第4巻第1，第2，第3，第4号において、それぞれ、19世紀末から1910年代，1920年代，1930年代，1940年代に発表された個々の研究の内容を整理する試みを、本誌第5巻第2および第3号において1950年代に発表された個々の研究の内容を整理する試みを、また、本誌第6巻第1，第2，第3，第4号および第7巻第2号において1960年代に発表された個々の研究の内容を整理する試みを、なし、そしてそれにつづいて、本誌第9巻第1，第3号および第10巻第1，第2号では1970年代に発表されたいくつかの個々の研究の内容を整理しようとしてきた。

本稿は、前四稿にひきつづき、1970年代に海外において発表されかつわたくしがみることのできた個々の研究の内容を整理する試みの一部として、1973年に発表されたS.カウシル (S. Kaushil) の一論文および1974年にその著作権が成立したT.サウエル (T. Sowell) の一著書のなかで示されている「アダム・スミスの価値尺度論」に関連をもつカウシルおよびサウ

ェルの各々の所論の内容を整理しようとするものである*。

(1) S. カウシル (1973)⁽¹⁾

カウシルは、1973年の論文においてスミスの価値分析の再評価を試みるのであるが、そこにはつぎのような見解が含まれている。

① スミスは彼の価値分析を、『国富論』第1篇第4章の終わりのほうの箇所⁽²⁾で、水とダイヤモンドの例を用いながら、使用価値と交換価値との区別をなすことから——また、ただ区別をするという目的のためにのみ、すなわち、彼の価値分析の主題つまり交換価値を選び分けるためにのみ——始め、そして、三つの章において、各々、(i)交換価値の「真の」(不変の)尺度(第5章)、(ii)交換価値の、因果関係的な諸構成要素(第6章)、(iii)正常(自然)価格からの現実(市場)価格の乖離(第7章)、といった観点からの交換価値についての分析を提示することを、約束している⁽²⁾。

② 概念のうえでは、上述の(i)は、交換価値という事象が出現してからのことであり、それは、交換価値の「理論」、交換価値の因果的説明といったことに関わるものではなく、むしろそれは、現存する交換価値の確認(identification)および資格証明(qualification)といったことに関わるものである。しかしながら、分析的な目的にとっては、尺度、というよりはむしろ尺度という概念は、交換価値の説明のための必要条件である。というのは、もし交換価値の共通の尺度をもたないならば、諸商品のあいだの交換比率を定量化しそして通約可能なものにすることができないからであり、そしてそれをすることができなければ、これらの比率の決定についての分析、因果的説明を始めることができないからである。いずれにせよ、スミスは、彼の諸隱喩的表現をごっちゃまぜにしているのではな

* 諸研究の発表年度の区分は、本稿にさきだつ諸稿におけるのと同様、著書の場合には、その原版もしくは初版が出版された年度に、あるいはその最初の著作権が成立した年度に、そして論文の場合には、それが最初に書物あるいは雑誌に掲載された年度に、したがった。

く、尺度の問題と原因の問題という二つの問題を、分析のうえでは統合されるべきものであるが概念のうえでは別個のもの、としているのである。⁽³⁾

③ (1)の交換価値の「真の」(不変の)尺度に関して、スミスは、穀物や銀という通俗的に理解されまた採択されている尺度はそれら自体の価値が不変ではなく、したがってまた、交換価値の異時点間および異場所間の比較のためには不適切で不満足なものである、ということを主張する。⁽⁴⁾

④ スミス自身はつぎのように考えている。すなわち、熟練および辛さの相違に関して平均化された平均的なタイプのある一定の労働時間のあいだにある平均的な労働者がこうむる「労苦と骨折り」および、犠牲にする安楽、快適さ、自由は、所および時にかかわりなく、その労働者にとっては同一の価値をもつものでありつづけるため、労苦や骨折り等々といった主観的な不効用を表現するところの「商品がふつう購買し、支配し、またそれと交換されるべき労働の量」が、真の、不変の尺度である。⁽⁵⁾

⑤ それゆえ、もし一商品あるいは諸商品の全体が、以前あるいは他の場所においてそうであったよりもヨリ多くの平均タイプの労働時間を支配するならば、スミスにしたがえば、この商品あるいはその全体は、リアル・タームでの価値において増加した、ということになるのである。⁽⁶⁾

⑥ しかしながらスミスはまた他方において、この支配労働尺度のもっと容易に理解できる客観的な写し(counterpart)を持つことの必要性ということに気づいていたのであって、この問題に対して彼は、遠くへだたった時点にわたっては生存穀物賃金(subsistence corn wage)の相対的不変性のゆえに穀物はその真実価値(real value: 支配される労働という観点からの価値)において相対的にヨリ安定的でありつづけるのにたいし貨幣や銀はそうでないと考え、貨幣賃金・単位尺度(money wage-unit measure)よりも良好なものとして穀物賃金・単位尺度(corn wage-unit measure)を示唆するのであった。ただし彼は、それはせいぜいのところ一つの近似的な写しであるにすぎないであろうということを実感しているのであった。⁽⁷⁾

⑦ なお、スミスは、成長ということを中心とする彼の議論にとって非

常に肝要なものである GNP の測定、GNP の異時点間および異場所間の比較をなすための一つの十分に確かな方策を苦心して自ら開拓していた、ように思える。実際、スミスの所論は、経済進歩の指標の必要性に答えようという一つの試みとして解釈されることもできるのであろう。そしてさらに、GNP の統計もまたより重要なことであるが指数というものも持っていなかったスミスは、経済進歩の指標として1人1時間当たりの生産性 (productivity per man-hour:PMH) に頼ろうとしていたように思える、というように言えるかもしれないであろう。(『国富論』第1篇第5章の後半におけるさらに第1篇の終わりのほうの銀の価値についての「余論」における) 銀や穀物の価値についての彼の強い関心は、たしかに、このことを示唆していると言えるかもしれないであろう。この解釈によれば、彼の支配労働尺度は、ちょうど、PMH と逆比例的な関係にあるもの (the reciprocal of PMH) ということになるであろう。⁽⁸⁾

⑧ だがもっと重要なことは、スミスはけっして、支配される労働を価値の原因として使用してはいない、また暗にそのようなものとして使用しているわけさえない、という事実である。支配される労働は、つねに、尺度として使用されているのである。「労苦と骨折り」という概念は、普遍的な不変の尺度としての支配労働尺度の妥当性を確認するためにのみ使用されていたのであって、交換価値についてのなんらかの因果的な説明を提出するために使用されたわけではない、のである。⁽⁹⁾

⑨ また、スミスはけっして、体化された労働 (labour-embodied) という彼の概念を価値の尺度として使用してはいないのであって、スミスの議論では一貫して、支配される労働 (labour-commanded) が唯一の尺度であるのであった。⁽¹⁰⁾

⑩ さらにまたつぎのことが指摘されてもよい。すなわち、スミスが交換価値の真の、不変の尺度として「労苦と骨折り」(すなわち不効用) タームでの支配される労働を使用したことは、もちろん直観的にはあるが、そのような尺度のための基本的な要件、すなわち、そのような尺度とは、

一つの与件 (a datum) であるべきであって価値事象を説明する因果関係的体系にとっては体系外のものであるべきである, という基本的な要件を満たしている, ということである。この事実がもつ意義は, とくに, スミスの批評家たちや解釈者たちによってたとえ完全に無視されてはいないとしても不十分にしか認識されていないがゆえに, 強調される必要がある。⁽¹¹⁾

① また, 確かに, スミスは, 労働の役割を強調しており, そして『国富論』の第1篇をつうじて, 「本源的代価」(‘original price’) あるいは「購買貨幣」(‘purchase money’) としての労働, また, すべての「生産物」の源泉としての労働ということに言及している諸言説は存在する。そしてそのことは, あまり注意深くない読者にとっては, 交換価値についての一つの労働説を示しているように思えるかもしれない。だが, もっと綿密に熟読すればつぎのことがわかる。すなわち, 「本源的代価」あるいは「購買貨幣」としての労働について語っている諸言説は, 労働の原因的属性よりもむしろ労働の尺度的属性に言及しているのだ, ということである。⁽¹²⁾

(注)

- (1) ここでは, S. Kaushil, “The Case of Adam Smith’s Value Analysis,” *Oxford Economic Papers*, vol. 25 (no. 1, March 1973)——以下, Kaushil [1973] と略記する——のなかで示されているカウシルの所論をみる。
- (2) Kaushil [1973], p. 61, p. 61n. 3. なお, 交換価値の分析についてスミスがそのような約束をなしていることを示すものとして, カウシルは, 『国富論』第1篇第4章の終わり近くのつぎのような文章を引用している。「諸商品の交換価値を規制する原理を究明するために, 私はつとめてつぎの諸点を明らかにしようと思う。／第一に, この交換価値の真の尺度はなんであるか, すなわち, すべての商品の真実価格 (real price) はいったいなにに存するか。／第二に, この真実価格を構成し, あるいはつくりあげているさまざまな部分とはどんなものであるのか。／そして最後に, 価格のこうしたさまざまな部分のいくつか, またはすべてを, ときにはその自然率ないし通常率以上に引き上げ, またときにはそれ以下に引き下げるさまざまな事情とはどんなものであるか。あるいは, 諸商品の市場価格すなわち現実の価格がそれらの自然価格とよべるものと正確に一致するのをときとして妨げる諸原因は, いったいどんなものであるか。」(Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, edited...by Edwin Cannan,

with an Introduction by Max Lerner, The Modern Library (New York: Random House, 1937)——以下、W. N. と略記する——, pp. 28-29. 大河内一男監訳『国富論』〈全3巻〉, 中央公論社, 1976年——以下、大河内訳と略記する, ただし, 本稿で引用する引用文の訳は必ずしもこの大河内訳と一致しない——〈I〉, 50ページ。/は原典において行変えが行われていることを示す。) Kaushil [1973], p. 61.

- (3) Kaushil [1973], p. 62. なお, カウシルによれば, スミスの議論における「原因」と「尺度」との間の混同という解釈は「限界革命」にその起源をもつ限界主義者の偏向に帰されるべきものであるということをヘンダースン (John P. Henderson, "The Macro and Micro Aspects of the *Wealth of Nations*," *Southern Economic Journal*, vol. 21 (no. 1, July 1954).) およびダース・グプタ (A. K. Das Gupta, "Adam Smith on Value," *Indian Economic Review*, vol. 5 (no. 2, August 1960).) が示唆しているが, それは正当なことであるように思える, とされる。Kaushil [1973], p. 69. ヘンダースン, ダース・グプタの上記の研究に対するカウシルの論評については, Kaushil [1973], pp. 68ff を見よ。
- (4) Kaushil [1973], p. 62. カウシルはつぎのようなスミスの文章を引用している。「……人間の足の大きさとか, 一尋^{ひら}の長さとか, 一握りの量とか, というようなそれ自身の量がたえず変動する量の尺度は, けっして他の物の量の正確な尺度とはなりえない。それと同じように, それ自身の価値がたえず変動するような商品も, 他の諸商品の価値の正確な尺度とは, けっしてなりえない。」(W. N., pp. 32-33. 大河内訳〈I〉, 57ページ。) Kaushil [1973], p. 62.
- (5) Kaushil [1973], p. 62. カウシルはつぎのようなスミスの文章を引用している。「等量の労働は, 時と場所のいかんを問わず, 労働者にとつては等しい価値をもつものということができよう。彼の健康, 体力, 精神が普通の状態で, また彼の熟練と技能が通常程度であれば, 彼はつねに, 自分の安楽, 自由, 幸福の同一部分を犠牲にしなければならない。彼が支払う代価は, それと引き換えに彼が受け取る財貨の量がどうであろうと, つねに同一であるにちがいない。なるほど, その労働は, より大きい分量のこれらの財貨を購買することもあれば, より小さい分量のこれらの財貨を購買することもあろう。だが, 変動するのは, それらの財貨の価値であって, それらを購買する労働の価値ではないのである。時と場所のいかんを問わず, 得がたいもの, すなわち獲得するのに多くの労働が費やされるものは, 高価であり, また容易に入手できるもの, すなわちわずかの労働で入手できるものは, 安価である。それゆえ, それ自身の価値がけっして変動することのない労働だけが, すべての商品の価値を, 時と場所のいかんを問わず, 評価し比較することのできる究極で真の標準である。労働は, すべての商品の真実価格であり, 貨幣はその名目価格であるにすぎない。」(W. N., p. 33. 大河内訳〈I〉,

57-58ページ。傍点の付されている箇所はカウシルがイタリック体にしてある箇所。「それゆえ、労働が唯一の正確な価値尺度であることはもちろん、唯一の普遍的な価値尺度でもあること、いいかえると労働が、いついかなるところで、さまざまな商品の価値を比較することのできる唯一の標準であることは明白であると思われる。」(W. N., p. 36. 大河内訳 < I >, 63ページ。) Kaushil [1973], p. 62.

(6) Kaushil [1973], p. 63.

(7) Kaushil [1973], p. 63. カウシルはつぎのようなスミスの文章を引用している。「遠くへだたった時点では、等量の、金銀またはおそらく他のどんな商品をもってするよりも、労働者の生活資料である穀物の等量をもってするほうが、よりいっそう等量に近い労働が購買されるであろう。それゆえ、遠くへだたった時点では、等量の穀物のほうが、同一の真実価値に近いものをもっている。すなわち、等量の穀物によってその所有者は、他の人々の労働の同一量に近いものを購買または支配することができるだろう。ここでことわっておくが、穀物の等量のほうが、他のどんな商品の等量よりいっそうこの任務を果たしやすというだけのことである。穀物の等量ですらも、この任務を正確に果たすものではないからである。」(W. N., p. 35. 大河内訳 < I >, 61ページ。) Kaushil [1973], p. 63.

(8) Kaushil [1973], p. 63, p. 63n. 2. いうまでもなく、ある一定量の生産物が支配しうる労働時間数そのものは、(その生産物のその一定量)/(1人1時間当たりの賃金)によって算出されるのであるから、その支配しうる労働時間数が、その生産物を生産するさいの1人1時間当たりの生産性 (PMH) と逆比例的な関係にあるためには、PMH が変化するとき1人1時間当たりの賃金もそれと同一方向に変化しなければならない。たとえば、いま、経時的に、PMH が α の率で上昇し($0 < \alpha$)、同時に、1人1時間当たりの賃金も上昇したが、その上昇率はPMHの上昇率と同じ α であった、としよう。その場合には、その一定量のその生産物が支配しうる労働時間数は、 α の率でのPMHの変化と逆方向に、 $\alpha/(1+\alpha)$ の率で変化する、ここでは $\alpha/(1+\alpha)$ の率で減少する、ということになるであろう。なお、1人1時間当たりの賃金の変化の、方向および率がPMHのそれと同一であるだけでなく、1人1時間当たりの賃金の大きさそのものがPMHとつねに等しい、という場合には、その生産物1単位が支配しうる労働時間数は、つねに、PMHの逆数ということになる。

(9) Kaushil [1973], p. 63.

(10) Kaushil [1973], pp. 63-64. このことに関してカウシルはつぎのような説明を与えている。すなわち、「……ある商品の獲得または生産にふつう用いられる労働の量が、その商品がふつう購買し、支配し、またはそれと交換されるべき労働の量を規制できる唯一の事情である……」(W. N., pp. 47-48. 大河内訳 < I >, 82

ページ。)といったような労働だけの1要素モデルという例外的なケースにおいては、そこでは体化された労働が価値の原因であるばかりでなく価値を測定しめるといった事情を考慮に入れると、原因(体化された労働)と尺度(支配される労働)とは事実上、同一のものになるかのようにみえる。だが、実は、これは、じやまなもの、この問題についての最大の混乱——実際にはスミスにはまったく責任のない混乱ではあるが——の出どころ、なのである。そしてリカードウがスミスを誤って解釈した誤り伝えたのはこの点においてであった。というのは、原因と尺度というこれら二つの概念は、1要素モデルにおけるそれらのものの互換性にもかかわらず、本当は、異なる別々のものであるからである。もちろん、その互換性は、体化された労働が1要素モデルにおける価値の唯一の原因であるということによっている。したがって、資本の蓄積された2要素モデルにおいては、商品に体化された労働はもはや、その商品によって支配される労働を「規制する唯一の事情」ではなくなり、資本(利潤)がもう一つの決定因ということになり、他方、土地の占有された3要素モデルでは、土地(地代)が第三の決定因ということになる。しかし、1要素モデルにおいてさえ、体化された労働が唯一の原因であるといったものは、スミスの本来の考えといったところにまでいたるものではなくて、一つの定義づけといった性格をもつものであり、そこでは、価値の原因についてのスミスの概念的解釈における残る二つの要因すなわち資本と土地のための席が空席のままになっているのである。(労働と資本という)2要素モデルにおいてもまた、体化された労働が価値の尺度と原因の両方として使用されることはできる。しかしこれもまた、スミスの本来の考えといったところにまでいたるものではない。なおまたそういったことは、資本という要因を労働という要因に変換することが可能であるかぎりにおいて可能なものであり、その場合には体化された労働と支配される労働とはふたたび一致するということになるのである。支配される労働が見てとれるほど明らかに(また、不可避的に?)ただ価値の尺度でありそして土地、労働および資本が共同して価値の原因であるのは、諸要素のうちの一要素として土地もくわわった3要素モデルにおいてのみである。しかしながら、スミスのおこなった概念的解釈においては、モデルの次元といったことにはかかわりなく、支配される労働がずっと唯一の価値尺度でありつづけたのであり、そして三つの要素はずっと、共同して価値の原因でありつづけたのである。スミスはつぎのように述べる。「あらゆる社会において、すべての商品の価格は、究極的にはこれら三つの部分のどれか一つに、またはそのすべてに分かれるのであって、あらゆる進歩した社会では、この三つのすべてが、大多数の商品の価格のなかに、多かれ少なかれその構成部分としてはいりこんでいるのである。」(W. N., p. 50. 大河内訳〈I〉, 85ページ。)[ここで注意しなければならないのは、価格のすべての異なる構成部分の真実価値は、そのおのおのが購

買または支配しうる労働の量によってはかられる, ということである。労働は, 価格のなかの労働に分かれる部分の価値だけでなく, 地代に分かれる部分の価値, および利潤に分かれる部分の価値をもはかるのである。」(W. N., p. 50. 大河内訳 < I >, 85ページ。) Kaushil [1973], pp. 63-64, p. 64n. 1.

なお, カウシルは, スミスが交換価値の投下労働尺度 (labour-embodied measure) と支配労働尺度 (labour-commanded measure) に関して混乱, 矛盾していたという誤った解釈は, 限界主義者の偏向にはなくリカードウにおうものであり, そしてそれが, その後のすべての誤解の源泉となった, とみている。このことを含めてスミスの価値分析に関する後代の諸解釈に対するカウシルの見解については, Kaushil [1973], pp. 68-71 を見よ。

(1) Kaushil [1973], p. 64.

(2) Kaushil [1973], p. 65. なお, カウシルによれば, スミスの究極的な立場では, 労働は, 「生産物」の唯一の本源的な源泉でも交換価値の唯一の決定因でもなかったものであり, したがってまた, 『国富論』には価値についての哲学的労働説と経験的三要素費用説という二つの理論が共存しているというウィーザー (F. von Wieser) やその追随者たちによる主張は支持しえないもののように思える, とされる。Kaushil [1973], pp. 65-66.

S. カウシル(1973)についての覚書 : (1)の結びに代えて

まず, カウシルは, 『国富論』第1篇第4章の終わりのほうの箇所においてスミスは水とダイヤモンドの例を用いながらみずからの価値分析の主題である交換価値を使用価値から区別したのち, つづく三つの章において (i)交換価値の「真の」(不変の) 尺度 (第5章), (ii)交換価値の, 因果関係的な諸構成要素 (第6章), (iii)正常 (自然) 価格からの現実 (市場) 価格の乖離 (第7章), といった観点からの交換価値についての分析を提示することを約束している, とするのであった。そしてカウシルによれば, 概念的には, 交換価値の尺度の問題とはもともと, 交換価値という事象そのものが出現してからのちにはじめて問題となるものであって, それは交換価値の「理論」すなわち交換価値の因果的説明といったことに関わるものではなく, むしろそれは, すでに存在している交換価値の確認および資格証明といったことに関わるものであり, 他方, もしも交換価値の共通の尺度をもたなければ諸商品のあいだの交換比率を定量化し通約可能なものに

することができず、またそれを行うことができなければこれらの比率の決定についての分析、因果的説明を始めることができない、この意味で、分析のうえでは、尺度、というよりはむしろ尺度という概念は、交換価値の説明にとっての必要条件なのであり、そして交換価値の尺度の問題と交換価値の因果的説明という問題は統合的に取り扱われなければならないものである、とされるのであるが、カウシルは、スミスのうえのような問題のたて方自体が、スミスが交換価値の尺度の問題と交換価値の因果的説明の問題という二つの問題を混同することなく、分析のうえでは統合されるべきものであるが概念のうえでは別個なもの、としているということを示している、とみるのであった。

そしてカウシルによれば、上記(i)交換価値の「真の」（不変の）尺度という問題に関してスミスは、穀物や銀はそれら自体の価値が不変でなくしたがってまた交換価値の異時点間および異場所間の比較のためには不適切で不満足なものであるとし、それにたいし熟練および辛さの相違に関して平均化された平均的なタイプのある一定の労働時間のあいだにある平均的な労働者がこうむる「労苦と骨折」および、犠牲にする安楽、快適さおよび自由は、所および時にかかわりなく、その労働者にとっては同一の価値をもつものでありつづけるため、労苦や骨折り等々といった主観的な不効用を表現するところの「商品がふつう購買し、支配したそれと交換されるべき労働の量」が真の、不変の尺度であるとしたのであり、したがってまた、スミスにしたがえば、もし一商品あるいは諸商品の全体が以前におけるよりもあるいは他の場所におけるよりもより多くの平均タイプの労働時間を支配するならば、この商品あるいはその全体はリアル・タームでの価値において増加したということになる、とされるのであった。またカウシルによれば、スミスはさらにこの支配労働尺度のもっと容易に理解できる客観的な写しを持つことの必要性に気づいていたのであって、スミスはこの問題に対して、遠くへだたった時点にわたっては生存穀物賃金の相対的不変性のゆえに穀物はその真実価値（支配される労働という観点から

の価値)において相対的にヨリ安定的であるのにたいして貨幣や銀はそうでないと考え、貨幣賃金・単位尺度よりも良好なものとして穀物賃金・単位尺度を示唆した、しかしそのさいスミスはそれはせいぜいのところ一つの近似的な写しであるにすぎないであろうということを自覚していたのであった、とされるのであった。そしてまたカウシルによれば、支配労働尺度についてのこのようなスミスの所論は、経済成長、経済進歩ということを中心に展開される彼の議論にとって必要なものとしての成長、進歩の指標を考案しようという一つの試みとして解釈することもできるであろう、とされるのであった。

さらにカウシルによれば、スミスの議論では一貫して、「体化された労働」ではなく「支配される労働」が価値の尺度として使用されているとともに、この「支配される労働」は決して価値の原因としてとらえられているのではなく、他方、「労苦と骨折り」という概念は普遍的な不変の尺度としての支配労働尺度の妥当性を確認するためのみ使用されていたのであって交換価値についてのなんらかの因果的説明を提出するために使用されていたのではないのであり、また、確かにスミスは労働の役割を強調し、「本源的代価」、「購買貨幣」としての労働、すべての「生産物」の源泉としての労働といった言説を示してはいるが、それは労働がもつ価値の原因としての属性というよりはむしろ労働がもつ価値の尺度としての属性を示そうとしているのだ、とされるのであった。

なお、カウシルによれば、従来それのもつ意義が十分に認識されてこなかったけれども、スミスが真の、不変の価値尺度として「労苦と骨折り」(すなわち不効用)タームでの支配される労働を使用したということは、直観的にはあるが、価値尺度とは一つの与件であるべきであって価値事象を説明する因果関係的体系にとっては〔与件としてその体系の外から与えられているものという意味で〕体系外のものであるべきであるという基本的要件を満たしていることになるのである、とされるのであった。

(2) T. サウエル (1974)⁽¹⁾

サウエルは1974年にその著作権が成立した彼の著書のなかでつぎのような見解を示している。

① 古典派価値論は、特定の諸市場における価格決定という狭い問題だけではなく、経時的な所得の機能的分配、総産出物の測定、農業財と製造工業財との間の相対価格の経時的な変化といったようなより広い諸問題をも、取り扱い、「価値」ということについての古典派の諸考へは、個々の生産物価格の決定の諸問題といったことをこえて、さまざまな目的のために産出物を測定もしくは評価することに関する諸問題といったことに、わたっていたのである。そして、そのような目的の一つは、厚生⁽²⁾の指標を提供するということであつたのである。

② スミスは、一国の繁栄をその国が蓄積した金ストックで測つた重商主義者たちとちがって、国民的繁栄を、その国の年々の、1人当たり所得というフローによって、測ろうとしたのであるが(W. N., p. lviii. 大河内訳 < I >, 1 ページ。), スミスの議論では、厚生⁽³⁾についての一指標として、産出物は、その産出物がどれほど多くの労働を支配しうるかということによって測定されるべきである、とされるのであつた。⁽⁴⁾

③ ところで、ある所与の時点で、所与の技術のもとでは、「他の人々の労働」の量という指標は、「他の人々の労働の生産物」〔の量〕という指標と同じようなものとなるのであるが、このことからスミスはいつのまにか、それらのものを、時間の経過があるときにも同義のものとして、したがってまた技術変化ということを考慮に入れることもなく、使用することとなつた。⁽⁵⁾

④ とはいへ、より根本的には、スミスは、財貨の効用は、それらの財貨の消費者たちがそれらの財貨を手に入れるために甘受するであろう労働の不効用というものによって指し示される、と考えていたのであつた。スミスはつぎのように述べている。「等量の労働は、時と場所のいかんを問わず、労働者にとっては等しい価値をもつものということができよう。彼

の健康, 体力, 精神が普通の状態で, また彼の熟練と技能が通常の程度であれば, 彼はつねに, 自分の安楽, 自由, 幸福の同一部分を犠牲にしなければならない。彼が支払う代価は, それと引き換えに彼が受け取る財貨の量がどうであろうと, つねに同一であるにちがいない。なるほど, その労働は, より大きい分量のこれらの財貨を購入することもあれば, より小さい分量のこれらの財貨を購入することもある。だが, 変動するのは, それらの財貨の価値であって, それらを購入する労働の価値ではないのである。時と場所のいかんを問わず, 得がたいもの, すなわち獲得するのに多くの労働が費やされるものは, 高価であり, また容易に入手できるもの, すなわちわずかの労働で入手できるものは, 安価である。それゆえ, それ自身の価値がけって変動することのない労働だけが, すべての商品の価値を, 時と場所のいかんを問わず, 評価し比較することのできる究極で真の標準である。労働は, すべての商品の真実価格であり, 貨幣はその名目価格であるにすぎない。」(W. N., p. 33. 大河内訳 < I >, 57-58ページ。⁶⁾

⑤ なお, うえのスミスの文章は一つの価値尺度71を定義しているのであって, それは, 一つの価値理論 (a theory of value) ではないのである。また, たとえスミスが厚生についての別の指標を選んでいたとしても, 『国富論』におけるどの本質的な命題も異なったものにはなっていなかったであろう。事実, スミスは, 「通俗的な意味」では別な価値尺度を選んだのであり, そして『国富論』全体をつうじてそれら二つのものの使用の間を行きつもとどりつしていたのであり, 彼の「真実の」(“real”) という言葉は, 時として支配労働量を, また時として物的生産の量を, 意味していたのであった。⁷⁾

(注)

(1) ここでは, Thomas Sowell, *Classical Economics Reconsidered* (Princeton, New Jersey: Princeton University Press, ©1974, 1st Princeton Paperback printing, 1977)——以下, Sowell [1974] と略記する——のなかで示されているサウエルの所論をみる。その発表年度の区分については, 上記書物の著作権が成立した年度, 1974年を記しておいた。

(2) Sowell [1974], p. 99.

- (3) サウエルはつぎのようなスミスの文章を引用している。「あらゆる物が、それを獲得した人にとって、またそれを売りさばいたり他のなにかと交換したりしようと思う人にとって、真にどれほどの値うちがあるかといえば、それによって彼自身がはぶくことができ、またそれによって他の人々に課することのできる労苦と骨折りである。」(W. N., p. 30. 大河内訳〈I〉, 52-53ページ。) Sowell [1974], p. 99.
- (4) Sowell [1974], p. 99.
- (5) Sowell [1974], p. 99.
- (6) Sowell [1974], pp. 99-100.
- (7) Sowell [1974], p. 100. なお、サウエルは、このように、古典派経済学では一つには厚生¹の指標を提示するという目的から価値尺度の問題がとりあげられ、そしてスミスは真の価値尺度、厚生²の指標を、支配労働量あるいは物産の量とした、とみるのであるが、さらにサウエルによれば、古典派経済学は、価値・価格の決定についての説明を与えるものというそれ自体独自の地位をもつものとしての価値理論に加えて、多くの価値「尺度」を生み出し、それらの尺度をさまざまな目的に応用したのであった、ただしその場合、ひとたびある考えを受け入れると価値「尺度」また特に不変の価値尺度といった考えそのものの正当性ということを問題にしなくては³ずであるけれども——サミュエル・ベイリー (S. Bailey) がなしたように——、その選ばれた特定の尺度が問題にされたのは、もっぱら、正当性ということからではなくて⁴ 便利性ということから、であるのであった、とされる。Sowell [1974], pp. 110-111.

なおまたサウエルは、古典派経済学の時代にあつてベイリーは、不変の価値尺度という考えを完全に経験的に具現するような物をもつことは経験的にも概念的にも不可能であるということ⁵を主張したのであり、さらにベイリーの一著書 ([Samuel Bailey], *A Critical Dissertation on the Nature, Measures, and Causes of Value: Chiefly in Reference to the Writings of Mr. Ricardo and His Followers*, London: R. Hunter, 1825 <鈴木鴻一郎訳『リカアド価値論の批判——価値の性質、尺度、及び原因に関する論文——』, 日本評論社, 1941年。>.) の表題にも示されているように、ベイリーは、価値の性質、価値の尺度といったことと通例混同されていた価値の原因⁶というものを前二者から明確に区別した最初の人物であつたのであり、そしてうえの書物のうち、表題中の「価値の諸原因」に当たる部分は価値「理論」を扱っていた、とみている。それについては Sowell [1974], p. 103 を見よ。また、ベイリーによる価値の尺度と価値の原因との相違に関する議論については、たとえば上掲のベイリーの著書の第10章「価値の尺度と価値の原因との相違について」も見よ。

T.サウエル(1974)についての覚書:(2)の結びに代えて

サウエルは、古典派経済学は価値・価格の決定についての説明を与えるものという意味での価値「理論」に加えて多くの価値「尺度」を案出し[ただし、サウエルによれば、古典派の諸議論のなかで「価値理論の問題」が「価値尺度の問題」とはじめて明確に区別されたのはベイリーによってであった、とみられるのであった]、そしてそれらの尺度をさまざまな目的に応用しようとしたのであって、それらの目的のうちの一つには厚生の一指標の提供ということが考えられる、とみるのであるが、そのサウエルによれば、スミスは事実上、価値「理論」とは別に、支配労働量という価値「尺度」を提出し、そして彼の場合それを厚生についての一指標として使用しようとした、つまり、産出物をその産出物が支配する労働量によって測定することによって厚生の一指標を得ようという考えを提出したのであり、スミスは根本的には、財貨の効用はそれらの財貨の消費者たちがそれらの財貨を手に入れるために甘受するであろう労働の不効用によって指し示されるのであって、そのような意味での労働にたいする支配力が価値の尺度を、そして厚生の一指標を提供すると考えていたのである、とみられるのであった。

なお、サウエルによれば、ある所与の時点で所与の技術のもとでは支配労働量という指標とそれらの労働の生産物の量という指標とは同じようなものとしてとらえられることもできるのであるがスミスの議論では事実上、それらのものは時間の経過があるときにも同義的なものとしてとらえられており経時的な技術変化という要素が考慮に入れられていず、そしてそのスミスの議論では、「真実の」という言葉によって事実上、時として支配労働量のことがまた時として物的生産の量のことが意味されているのであり、そのこと自体は『国富論』におけるスミスの議論そのものに本質的な影響を及ぼすものではなかったのではあるが、それら二つの指標は『国富論』全体をつうじて入れ代わり立ち代わり繰り返し使用されている、とされるのであった。